

ラビットレコーズ・安藤真也&原口順です。

私達の演奏しているインド古典音楽について、少し紹介させていただきます。長文ですが、ご存知の方も、初めての方も、辛抱強く読んで頂けると幸いです。

始まりは、紀元前 1000 年程のサーマヴェーダ(聖歌)とされています。

古代インドのリシ(賢者)は、人里離れた森に住み、医学・科学・音楽・占星術・天文学やその他の分野の学問を、自己認識に到達するための手段としてヨーガ(修行法)の実践を伴いつつ伝えたといわれています。

15 世紀には、インドを統一していたムガル帝国の建立により芸術として開花し発展しました。

その時代の色が今だに色濃く残っていると感じます。それは、師から弟子(親から子)へと長い間受け継がれてきたという事と、ヴェーダや仏教にある思想の中で、無から創造され継続し破壊され繰り返す輪廻の世の無常を表していると感じるからです。

また、それとは対照的に、もしくは、それだからこそとも言えるのですが、即興(その時作る)音楽の為、長い歴史の中でインド国内外の古い物から新しい物までの音楽や、学問、思想、宗教、民族からも影響を受け、現代も調和し融合し変化し続けている現在も進行し続けている音楽でもあるのです。

90%以上が即興演奏のインド古典音楽は、決してデタラメをしている訳ではないのです。当然ですが、基本を学びます。基本練習と基本パターンを何年か練習し理解します。私達は師(グル)から学ぶのですが、どの師も同様に基本練習には終りは無いと教えます。始めは全く理解できなかったのですがやっと理解し始めました。

その一つ、音階やリズムは数字と深く関わっていて、数字で分析・構築していく考えがあり基本に深く根ざしています。簡単に数字を使って説明しますと、例えば 1 と 2 があるとします。この二つの数字の並べ方を変えると 1,2 の他には、2,1 が有ります。ここでは並び方に 2 パターンが存在しています。では、1,2,3 ではいくつでしょう？ 答えは 6 パターンです。では少し発展させて「ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ」という 7 音階(1,2,3,4,5,6,7)のパターンはいくつでしょう？ 答えは 5040 です。2~7 までのパターンを合せると 5912 です。更に 7 までの数字で始めの 2 つの数字での並べ変えで考えると 1,2 1,3 1,4 1,5 1,6 1,7.....と言うように考えがあり、それを突き進むとついには天文学的数になりますので、それは程々のところで後は数学者に任せましょう。とにかくこの数字的構築も実は即興演奏のベースにあり、基本として学んだ上で出来上がってくるものです。

インド古典音楽は即興演奏なので、沢山のパターンが必要とされる為、このような考え方が生まれたという事と、さすが 0 を生み出した国インドだと、ふと気付かされます。しかしこれは、あくまで数字を使っての一例であって数字音楽をしてるのではありません。数字的構築がベースにありながら、神秘家の靈感・音楽家の想像力・地方の民謡・詩人の描く理想像などからこの音楽は生まれてきています。

この様な考え方に基づきながら、音色・リズム・テンポ・抑揚などを美しく表現する為の

基本を一生を通して磨きを懸けます。それは同時に、内面にも言えることです。特に私は、始めから上手く出来る方ではなかった為に、自分の弱い部分と今も向かい合う事が多く、それを我慢するのは難しく、それを続けると具体的に、ある一定の人や出来事に対しての恨みや憎しみや悲しみが現れ、次はそれらから逃げる為の口実や誘惑が現れます。しかし、ここで大事なのは、現実の結果に捕われず、静かにただ与えられた事をするのみという事です。

そうしてしばらくすると、日頃から他者に対し傲慢で軽はずみで、目の前の事に対して適当で、自分の知っている概念だけで判断して他を受け入れず軽薄である自分というものに気付きます。それに気付くと、次は、感謝が現れます。

今もまだ終わることなく学び実践し続けてる途中ですが、私は今までいかに心の好き勝手にさせてきたのかと感じました。そしてこの「心の好き勝手」を少しずつ捨てていくことにより、その空いた部分が違う感情に変わることには気付きました。自分を変えられるのです。

そして、具体的にインド古典音楽を演奏するには、沢山のパターンの奏法とどう即興していくかを学び、その中で直感力を身につけて表現していきます。そして本番では会場全体のエネルギーを感じ、師から教わったパターンからの引き出しと閃きでその日の演奏を創り、皆で共有し継続され、やがて破壊され消えて行きます。

実際、演奏は 2 つの要素で創られます。長い歴史から吟味され確率されて師から受け継ぎ最もどの流派でどの師から習っているのかが色濃く出る部分が 10%と、残りの 90%の即興部分です。演奏のはじまりは、長い歴史から吟味され師から受け継ぐ部分からスタートすることが多いでしょう。それは、ちょうど旅先では初めはガイドに連れられ出歩くのに似ています。そして街の事が分かるようになれば一人でも自由に歩きまわれる様に、師から教わったパターンやバリエーションを元に直感と閃きで演奏していきます。

ここで重要なのは、直感と閃きです。これを身につける為に、インド古典音楽の奏者は師からの口承と、師の演奏を聴いてキャッチする事で学びます。そして、弾けないフレーズがあると私の師はいつも、「どの様に作られているか考えろ しかし考えずに弾け」と言われます。考える行為は学ぶ時には必要なのですが、演奏中は逆で特に即興演奏の場合は、考える事によりその瞬間の直感や閃きを逃してしまうからです。思考を止める事により「今」という瞬間だけに止まります。それは、未来に無計画である事や過去の出来事を無くす事とは違います。今に止まると言う事は、今を生きるという事なのです。とても純粹で、あるがままの自分なのです。

私達は、光栄な事にお互いの師(グル)から、この音楽を伝えていきなさいと言われていました。しかし 3000 年以上にも亘るこの音楽の一点でしかない私達に、この音楽はこうでなければいけないといった事は、私的にも見つからないだけでなく、知れば知るほどに壮大な宇宙を感じています。

ただ、もし言える事があるとするれば、私達が知っているこの音楽の楽しみ方です。

それは、言葉(歌詞)で表現されているメッセージに共感したり、体を触れ合い踊り一体になるという音楽の楽しみ方とは少し異なります。この音楽は「心の中で感じる事」が大半を占めています。その為には、まず静かになることが始めにする最も重要なポイントと言えます。

言葉のメッセージに共感する音楽も心の感じ方は人それぞれですが、まして音だけになればその感じ方は更に多様になるのは自然な事です。心の中のイメージーションから始まる心の旅です。しかし、心には形が無い為、認識するのは難しく、時には心の映し出す世界が感じられない場合もあります。そんな時は、まず、これからの事・今までの事や誰かに対する不安や心配という感情を、演奏を聴いている最中は止めてみる事です。そして、それでももし出来ない時は、気にせず、そのまま構いません。幸いな事に心の中を覗ける人は世界にほんの少数しかいないので、自分の心の中が露呈して困るという事態も起こらないのですから、音楽を聴きながら心配事をしたり、想像の世界があるのならばそれに思いつき浸ろうではありませんか。そして眠ってしまっても眠りそうになってもいいのです。実はこの様に自由に過ごせる音楽でもあるのです。

また、他には、天文学的リズムサイクルの数字遊びや、旋律が醸し出す世界に酔いしれるという楽しみ方もあり、そのどれが正しいとか優れているという事はありません。

ただこの楽しみ方は、人それぞれ顔や性格が違う様に、すぐに分かる人と学ぶ事により分かる人との2つに別れます。その理由の1つで、私達の大半が西洋音楽をベースとして学んできた概念での判断をするからなのです。

この音楽はインドです。アジア文化の中で生まれた音楽なのです。実は、ラーガ(=インドの旋律または曲の事、アジア音楽の特徴のひとつ)でよく日本でも同じ旋律に出会いますし、他にもアジアの西アラブから日本に伝わったとされる共通するものもあります。今の日本では、もうその影すら薄らいでいますが、確実に私達の深く DNA もしくは魂にアジア文化の感性が残っているのです。世界的シタール奏者 Pt.ラビ・シャンカールが、彼の著書の中での日本の皆様へのメッセージで、『伝統音楽ばかりでなく、ありとあらゆる日本の文化の領域におけるこの 100 年程にわたる西欧のはかり難い程に大きな影響力に思いをめぐらせる時、私はこの純粋さがいつまで保たれるかと気がかりです。』と 40 年前に書いています。

このメッセージからも伺い知れるように、日本を始めアジア全体にこの状況は広まりつつあります。今年の冬にインドに行った時にも同じ事を感じました。今もまた抑圧されていた民衆が、次第に画一化された商業ベースのアメリカの音楽へ魅了されていっています。勿論アメリカ音楽が悪いと言っているのではありません。元の純粋な音楽は素晴らしいものが沢山ありますし、ボブ・ディランが歌うように時代が変わるのですから。しかし軍事力、政治力、経済力を使い、文化と言うポップなキャッチコピーを利用して抑圧するのは同じ事の繰り返しではないかと思うのです。私達の想像以上に、純粋な楽しみや感性が失われこの世への魅力がどんどん失われていっている事を感じてしまいます。実は私達の楽

しみ方は、想像以上に沢山ありどれが正しいとか優れているという事はないのですが。

さて、インド古典音楽の醍醐味は、その時に集まってくださった皆様と演奏者の心から出るヴァイブレーションもしくはエネルギーが一体となってコンサートを創りあげていく、ということです。目に見えない、感じられない、特別に奇跡があるわけでもない、普通の出来事ですが、実はそれが特別な事なのです。例えば、海外で言葉が通じない時、いつも居るはずの人が居ない時、誰かが助けてくれた時…などに、いつもは普通にある事が実は特別だったと改めて感じる事が出来るでしょう。当たり前だと思っていた事が実は特別だという事。例えば、人間社会では当たり前の、約束の時間にその場所に行くという事もそうです。ツアー中、街から街へと移動する私達は、無事に到着出来る度にいつもその事に感謝をします。また、コンサートに来たくても来れなかった人もいれば、なんとなく来てしまった人もいらっしゃいます。全てがご縁の元に集まります。これもまた特別な事です。そして演奏が始まります。

即興音楽は、インド古典音楽のみではなくいろんな音楽ジャンルでも見られます。18世紀の西洋クラシックや、日本では琴・三味線など、50年代のジャズ、60年代のロックでも、スタイルは異なりますが、最もその音楽がエネルギッシュで高い芸術性を持っていた時代にはいつも即興演奏は行われていて、それはとても重要であり、いつの時代も、奏者の演奏に会場のエネルギーが加わり完成していったと言えます。その中でも特にインド古典音楽の即興演奏は、会場全体が演奏に加わる部分を最大限に取り入れた演奏方法なのです。

様々な音楽ジャンルにおいて何故、即興音楽が姿を消していったかと言う事が気になりますが、私が考える理由は、あらかじめ作られた曲は、エンターテインメント性が強いと言う事です。誰もが知っている曲なら尚更で、聴く側は私も含め、きっと「あっ知ってる」と安心します。私達は過去に知った概念の中で判断しているのです。今を生きているのに過去からしか受け入れられないのです。

それに対して即興音楽は、今この瞬間、リアリティが浮き彫りになります。心の状態が浮かびあがります。技術についてはよく神がかりなどと言う言葉を聞きますが、あくまでも日々の練習の成果でしかありません。もし奏者自身が言っているのでしたらその奏者が自分への観察が薄いと言う事です。その様にうっかり見過ごす心が重要なのに、怠慢にも見過ごしているその間にも演奏は一瞬一瞬繕うことなく創られていきます。そして、人によってはそれを受け入れ難く感じる人もいれば、心地よく感じる人もいます。勿論、受け入れ難く感じた人は決してよい気持ちではないでしょう。私自身も強すぎる向上心の為に自分のもと出来ると勘違いして、今日の演奏は良くなかったという感情に捕われ、ある時は一ヶ月以上に亘りブツブツ言って一緒にいるパートナーまでもを不快な気持ちにさせたこともあります。周りを巻き込むこの不快感、受け入れ難い現実を前にして、もし受け入れ(観念)が出来れば、自分の概念からの期待を満たす以外の楽しみもあると知れば、あるものをあるがままに受け止められれば、、私たちは、色々な出来事や人や生命・自然・宇宙とも、インド古典音楽の様に究極のせめぎ合いの中で調和し 融合していけないのではないで

しょうか。だから心で感じる部分が大半をしめる音楽だと言えるのです。

「心」について少し触れると、まずここで述べる心の状態は演奏者からの視点であり、あくまでもインド古典音楽を楽しむ為の範囲です。(それ以上の事を知りたいのであれば修行を重ねたヒンドゥ教のスワミ(お坊さん)やサドゥ(行者)や仏教のお坊さんにお尋ね下さい。)心は形がありません。音を聞くことも、目で見ること、感触も、匂いも、味もありません。心はそれを個人的概念から判断しよし悪しを決め、幸せになったり不幸せになったりします。その様な優柔不断で認識が難しいものを捕らえるのは至難の業ですが、体の動きを止めることによりいくらか具体的にもなります。そして、抑圧するのではなくそれを受け入れる事により、今に止まることができます。実はそうすることにより、その人その人の演奏を聴いての楽しみが生まれます。とてもシンプルな事ですが、実はシンプルな事こそ難しいのです。人は自分の概念で都合よくまとめシンプルにして理解する事は得意ですが、シンプルにあるがままを受け入れる事や、その実態や原因を解明しシンプルにする事が苦手だからだと思ふからです。

それが出来る状態になれば、あらゆる楽しみ方をしていても音楽を感じるにより一体感が生まれる様に、それぞれの人生を生きていても今この瞬間を共に生き、日々の中で、何をクリエイトし何をチョイスするかがわかるのではないのでしょうか。何の為に生き、何が幻影で何が実態なのか、私たちは何なのかがわかるのではないのでしょうか？

インド古典音楽は、奏者も聴衆にとっても、心より奥深くから外の世界への愛と平和のメッセージがこめられた実践的な音楽なのです。

<ヴェーダの一説から>

オーム ブラッフマンが師と弟子の両方を導いて下さるように「彼」が、私達双方をやしなって下さるように 私達が豊かな活力をもって共にはたらくように 私達の学習がたくましく実り多いものであるように 愛と調和が、私達の中に宿るように。オーム シャンティ シャンティ シャンティ

※一説によるとサーマヴェーダは、三昧(サマディー)の状態の時や、その後に舞降りてくる至福(アーナンダ)の時に唱えられたと言われます。あまりの甘味にロマンティックにならずには居られなかったと言われています。

インドクラシック音楽ラビットレコーズ <http://rabbitrecords.com/>



実に、文章や言葉にかえると野暮たいことを書いてしまった。音楽であれば美しく優美に表現しているのに。(安藤真也 著)